



北陸産地で織機900台以上を有する織布最大手の丸井織物（石川県中能登町）は、合織の軽量高密度織物の追い風も受けて一昨年春からフル稼働を続けてきた。ただし今後は、円高による輸出の減少や高密度織物のピークアウトなども想定し、新たな商品開発を強めていくとともに、糸と染色加工を両方見渡せる織布の立ち位置を生かし、「自律化」を進める。

■ 昨年は、ダウン側地などで使われる軽量高密度織物

がスポーツ、カジュアルなど全般的に好調に推移し、生産量ペースで1割ほど伸ばした。10年3月からフル稼働が続いてきたが、今後の先行きは楽観できない。欧州の景気は不安を抱えているし、以前のように先物のオーダーが入る状況ではなくなってきた。一方で、韓国や中国メーカーのキャッチアップも進んでいる。軽量高密度はトレンドの変化でポリウレタンゾーンは減るだろうし、量的にはこの冬（11～12年秋冬）がピークと見ている。しか

主体的に開発できる力持つ

し、「軽くて快適」といった素材のニーズはあり、定番として残る部分もある。

われわれとしては、これまでの「細番手」「高密度」一辺倒だけでなく、新しい機能や快適性を追求して付加価値を出していきたい。例えば、制電糸やハイマルチ糸などの特殊糸使い、二重織りやストレッチなどの特殊素材、それに後加工との組み合わせなど、日本が強みとする分野で差別化出来る。

■ 産地では委託加工から脱する「自立化」が言われてきたが、私はあえて「自律」の字をあて、それを目指してきた。自律化とは、従来の受け身の委託加工から脱して自販を行うだけでなく、提案型の委託加工も強め、機屋としての主体的に開発できる力を持つという意味だ。

■ 現在は東レグループとの取り組みが多いが、提案型委託加工で、下請けではない主体性を持った連携していきたい。自律化策の一

つとして、06年に開発拠点のテキスタイルスタジオを設けたが、ここをきっかけにアパレルメーカーとの接点が出来ると成果が生まれている。

織りという工程は、サプライチェーンの中で優位な位置にあると思っている。原料の糸と染色加工との中間にあり、両方を見渡して物作りが出来る。この機能を強めるため、2年前から染色の技術者を採用し、さらに最近増員した。この成果が現れるのはまだ先だろうが、加工特性も考えた織り設計を進めるなど開発面で既に変化が出ている。

■ 今後は、中国でも国内同様、高度化が必要だ。中国の富裕層にアプローチするなど内販を強められないか、エージェントなどと接触しているところだ。生産拠点の丸井織物南通を生かしながら、日本製品を売り込んだり、場合によっては韓国に委託生産したりといった方法もある。

立ち位置生かして「自律化」